あさ 7

2023

亀田虎童子

かき氷恨むともなく天を見て

昼酒の昼幽かりし醉芙蓉

もう一つ欲しくなりたる氷菓子

長生きをせよと放せり甲虫

ふくろふのつまらなさうに眼つむりぬ

あを

七月集

今年の花

佐藤　竹僊

チンドン屋冬の踏切一列に

蠟梅をすこしあるきて梅ひらく

榠樝の實高きにのこり梅ひらく

ほろほろと身のこぼれたる蜆汁

天氣圖の海に雨降る桐の花

屋上庭園春の落葉と蟻さがす

老といふ便利な道具春なかば

沈黙の春に咲きたる銀木犀

春の道追越してゆく迷彩車

花よりも短きいのち晝のてふ

父子草母子草とてさびしき名

世づまりてむせつつすする心太

身の内に懸かれる滝の夜をひびき

素麺を茹でる菜箸妻の焦げ

隣のビルの屋上にゐるアロハシャツ

日記～令和五年五月

篠田大佳

氏神の祭囃子の遠く消えて

若僧（にやくそう）の木魚四つ打ち夏満月

獏に似てゆるキャラ夏の夜に笑む

別辞残る初夏の廃墟のレストラン

かくれんぼにキックボードを駆る五月

野馬追の騎馬は待てぬや神田祭

夏めくや旅の男女は赤の他人

五月尽サラブレッドは呪ひの子

銀座（六月号作品）

須賀敏子

銀座まず郵便局へ風ひかる
マネキンの回るユニクロ春の色
銀座には「イッセイミヤケ」春隣
春風に蓑虫ゆらりゆぅらりと
水仙や湖面に映る榛名富士
春の月孫へのカード投函す
又増へし診察券や春深む
たっぷりの鈴蘭挿して誕生日

新茶汲む

須賀敏子

新聞を洩れなく読んで夜のつまる
画眉鳥の鳴き声追へば若葉風
来年も此処で咲いてよ桜草
燃えて咲く那須高原の躑躅かな
背丈より高い処に花南天
ミシン踏む窓を横切る黒揚羽
青紫蘇を刻む心を軽くして
目標は早寝早起き新茶汲む

荒川自然園

都築繁子

白鳥の池のねぐらや風薫る
自然園裸婦像二体青葉風
窓みどり文豪好みの万年筆
荒川線に沿ひで彩る薔薇の花
歩いては佇ちては見入る薔薇の花
館薄暑ルーブル展の長い列
工芸展の大作カフェの窓青葉

葉桜

長崎桂子

葉桜や帰る園児のにぎやかさ
葉桜の夕べの風やよみがへる
葉桜の堤防ゆるりゆるり行く
母の日の娘の厨ごとうれしかな
蜜蜂や赤白黄色の花めぐり
原っぱの草は元気や花五色
伊勢神宮参道涼し癒さるる
茶をすする心身いやす五月の気

若葉寒

森なほ子

春驟雨海になだるる千枚田
貝桶の貝散らしあり花曇
春の波幾重に寄する千里浜
子雀の着地の脚を崩しけり
子雀の降りては戻る同じ枝
明け方の夢忘れたり街薄暑
蝋石の欠片どこかに春の闇
夏めくや近道といふ田んぼ道

雑詠

渡辺京子

重さうにバラうつむひて枝の先
登山靴ここは我が場所松落葉
蘖に思ひをたくす風来坊
あれこれを減らせぬ日々や麦の秋
古き友痛みそれぞれ薄暑かな

松山・弓削島

赤座典子

濠沿ひの坊ちゃん列車風薫る
身を屈め鳩に向き合ふ半ズボン
レース着てチワワの背伸び乳母車
船も水脈も白く煌き夏来る
ハッピーアワーは道後ビールとじゃこ天と
薄暮の海飽かず眺めるバルコニー
口取の粽小芋に支へられ
島めぐるサイクリストに夏の雲

大宮薪能

秋川泉

薪能社の烏しづまりて
薪能シテの呼吸の深くなり
小雨なか炎は高く薪能
胸にだくラベンダーの香雨しとど
雨の夕ひたひたひたと薔薇かほる
のびるのびるエアープランツの夏
分蜂の蜂は僧侶をかすめをり
黒々と分蜂するは桃の木ぞ

五月の風

七郎衛門吉保

口の端になくメーデーや落下傘
忘れない「平和」憲法記念の日
拵をかざし見栄切る端午かな
「生まれたい」そんな世界に子供の日
追っ掛けの娘五十路も雲の峰
マルクスを見直す風や山笑ふ
用水を黒々満たし田植待ち
百年を切りに廃刊ラムネ玉

神田祭

篠田純子

鳳輦の將門怖し拝みけり
法螺貝に猛る野馬追神田祭
傘に玉回し祭の大神楽
付け祭御伽噺の山車三基
ちんどんのクラリネットや付け祭
腿に蝶のタトゥーの少女夏立ちぬ
青空にハンカチの花笑ひをり
小賀玉の花の香こども歌舞伎の日

炑收集

もう一匹出てきはせぬか蝉の穴　亀田虎童子

¤

うすらひを窓に嵌めたるやうな日日　佐藤　竹僊

柳の芽道を訊かれて「アイドンノウ」　篠田　純子

少年の冒険歩調夏隣　篠田　大佳

約束の日に手紙来ぬ夏隣

マネキンの動き出しさう春の街　都築　繁子

カラフルなふはふは遊具若葉風

春立つや海は譜曲を奏でをり　長崎　桂子

見下ろして屋上ばかり銀座の春　森　なほ子

屋上に桜蕊降りすぐ掃かる

永き日のマネキン回りつつ欠伸

青き踏む母子も一人もカップルも　赤座　典子

日本語を銀座で探す啄木忌

異国語と桜しべ降る中にあり　秋川　泉

新緑やふはふはの服くるくると

屋上の植木回廊風ぐるま　七郎衛門吉保

喜孝抄

五月号作品より

篠田大佳・森なほ子・佐藤喜孝

潮の香のつかず離れず干鰈　　亀田虎童子

作者も忘れられてゐる昔日の『題詠しりいず・香』、遊び心で詠まれた俳句が突如目の前にあらはれ驚かれ、また不本意であったらう。おゆるしを。

薄い身の鰈、干されて一段とその薄さが際立つ。それを箸の先でほぐす。塩加減も上々、「潮の香のつかず離れず」は痺れる。干鰈の姿を容姿でなく「香」で捉へたユニークな作品。

虎童子さんは釣が趣味。生きた魚を見て触れた人の持つ鋭い観察眼である。（喜孝）

＊

鰈の干物のにおいや味を想像します。海水の塩を用いて干しているのでしょう。潮の味がしながらも魚本来の味も主張してくる。自然の恵みを頂いている作者を掲句より読み取ります。（大佳）

冬をはる黄になるまへに渡らねば　　佐藤竹僊

黄色になる前に渡るのは青信号。そろそろ冬が終わりそうだと、焦っている渡り鳥を想像した。池の鴨もうろうろして落ち着かない（ように見える）。この時期の渡り鳥の心境を詠んだ句が他にあるでしょうか？　竹僊さんならではのユーモラスな句！（なほ子）

恐竜はこのごろおしゃれ新學期　　佐藤竹僊

成程、人間が想像で描くものは、デザインに流行り廃りがあるのだと思いました。学校に通う子たちの手提げ袋などにも、最新の流行を取り入れた恐竜があしらわれているのかもしれません。といっても、造形の基本は変わらないでしょうから、微細なタッチの違いで差をつけているのかなどと思いました。（大佳）

瀬戸の春色香あまたやオリーブ油　　七郎衛門吉保

瀬戸の名産であるオリーブを用いた観光のお土産用のオリーブオイルがあって、それは色々なにおいや色がついた変わり種がたくさんあるという旅の思い出を読みます。味覚は「瀬戸」の旅枕に想像を委ねて、視覚的、嗅覚的な面白さが強調されています。（大佳）

遠霞瀬戸の小島のカフェオーレ　　七郎衛門吉保

充足した旅の様子がうかがへる。名詞を「の」でつなぎ、名詞で留める。ゆったりとした表現は作者の心持ちに適ってゐて気持ちが良い。その地が作らせてくれた一句かもしれない。（喜孝）

柳の芽ひと雨に伸び晴に伸び　　篠田純子

植物の成長を長い時間をかけて観察した句と読みます。雨も晴れも成長の糧にする植物の強かさと、柳のしなやかなイメージの対比が面白いです。（大佳）

＊

春になると寡黙だった柳の木が春も一変する。花も咲かぬのに目立つことハンパではない。句会場のある公園に桜が咲き始めた。桜のうしろに柳が静かに立ってゐた。魅力的な若緑が桜の花を惹きたて、街中の風景とは思へなかった。作者は柳の成長の早さを「雨に伸び」と詠む。そこでをはらず、「晴れに伸び」ともう一押しする。ここに感心した。（喜孝）

旅人の笑みの寂しさ春夕　　篠田大佳

「旅人」という語にまず捕まった。続く「笑みの寂しさ」、そして「春夕」全てロマンチック、かつノスタルジック。牧水の歌や藤村の詩「小諸なる古城のほとり」等々の趣に、幾度も読んでは浸るのであった。（なほ子）

＊

幾山河越えさり行かば寂しさの終てなむ國ぞけふも旅ゆく　　牧水

掲句を読んだとき若山牧水のことを知らぬ私でもこの短歌が浮かんできた。牧水歌は季節を限定してゐないが、大佳さんは「春夕」と季節と時間を定めたところに大きな違ひがある。牧水歌の「寂しさ」に加へて「笑みの寂しさ」と。比べて読むと差異がなかなか面白く深い。（喜孝）

春の雪都心は何時も工事中　　須賀敏子

春の雪の儚い情景の中に、喧しい工事の音が聞こえてきます。音や振動の冷たさに加えて、剥き出しの都会の土が冷たくなって、指先のごとく土が凍えるような感覚も覚えます。都心にある熱狂の隙間の寂しさを喚起します。（大佳）

初めての写経終はりし蝶の昼　　須賀敏子

般若心経を写経されたのだらう。般若心経は二六〇文字ほどあるとか。「蝶の昼」とある。朝から写経を始められたのであらう。根を詰めてからの慣れぬ写経。書きをへて仕上がりを眺めれば気持ちよい充実感。「蝶の昼」は敏子さんにとって新しい季語の使ひ方をひとつ手に入れた。

心経に無の字が十余沙羅の花　　武井石艸

石艸岳人晩年の作品。よく仏像も彫られてをられたのをこの句を機縁に思ひ出した。（喜孝）

友の訃や白木蓮の暮れなづむ　　都筑繁子

友の訃報。私達の年代では、誰しも幾度かは経験しなければならないだろう。白木蓮はこの句にふさわしい。多くは言わず、白木蓮に託したのが良いと思います。夕闇に浮かぶ花は友が別れを告げているように思われる。（なほ子）

古民家の道具に記憶日脚伸ぶ　　都築繁子

いつより古い時代の建造を古民家といふのか。

「古民家」とは茅葺や草葺屋根日本瓦葺屋根、太い簗がある。木造建組工法で建てられている。築五十年以上経っている。」

と。はっきりとした法律ではないが常識的な線引きのやうです。五十年前といふと昭和五十年、私の感覚ではもっと古い建物のイメージである。作者、古民家園を訪ねたをりすっかり忘れてゐた懐かしい物がいくつも置かれてある。目にした途端、記憶がその物を通してありありと時間が巻き戻される。「日脚伸ぶ」はその記憶が温みのあるものであることが知れる。（喜孝）

白と黄の初蝶や石燈籠めぐり　　長崎桂子

初蝶という季語は、境界の象徴として用いられることが多いようです。作者は初蝶が家に訪うのを目で追いかけて、描写しています。初蝶は作者宅の庭中をゆっくり巡って、季節や年の境界、すなわち春の訪れを告げています。（大佳）

初蝶来上下左右に植込に　　長崎桂子

滝春一先生に「初蝶やいのち溢れて落ちつかず」がある。この「初蝶やいのち溢れて落ちつかず」の句をリアルにドライに表現されたのが桂子さんの作品。蝶の出初めはまだ花が少ないとでも言

ひたげに「植込みに」と詠まれた。リアリストの作者らしい措辞である。（喜孝）

老梅に獣めきたる幹ありぬ　　森なほ子

植物は、動かない静かな存在という印象ですが、老梅の「獣めきたる」は我々の先入観を刺激して、植物の荒々しさを描き出し、あるいは、植物の静かに見えることは、本当の静かさとは異なることを読者に訴えかけます。（大佳）

名も知らぬ春の小川の水濁る　　森なほ子

俳句といふものは不思議なものである。難しい語彙を使って高邁な俳句があるかとおもふと、平凡で見過ごしてしまふ俳句が、読み手の心境によりしみじみ心に届く俳句がある。

この句、表現を凝らさぬ素朴な詠みぶりに好感をもった。通俗的な常套句「名も知らぬ」もなぜかこの句では軽薄さが見えない。きっと下五の「水濁る」の作用であらう。この小さな川も「春の小川」と詠まれて生き生きと流れはじめた感がある。（喜孝）

岩海苔煮る島の醤油の甘きかな　　赤座典子

作者は春の瀬戸内を旅された。岩海苔は、内陸に住む私たちにはあまり馴染みのない春の季語だが、私の電子辞書でも十の例句が載っていた。そんな季語を使う機会を得られるのも旅すれば

こそ。小豆島は全国有数の醤油の産地、岩海苔とのコラボは当然の産物。お土産は岩海苔の佃煮でしょうね。（なほ子）

＊

作者は私と比べものにならぬ優れた味覚をお持ちの方。「甘い」はただ甘味があるといふほかに「うまみ」といふ意もあるさうだ。私には醤油の差をそれほど感じぬ。近くの回転寿司屋には四五種類の醤油が置かれてゐる。一度は試したが、二度目はどれでも同じと択ばず使ってゐる。掲句は旅先の島の醤油を「甘きかな」と堪能し旅情を深めてゐる。（喜孝）

雪の午後ひりひりとかむ生姜糖　　秋川　泉

雪の日に体の先端が冷え切っているのでしょうか、生姜糖を舐めて、体を温めているようです。雪とは異なる文脈の刺激、生姜糖のひりひり感が徐々に作者の体を温めます。雪の声と生姜糖の声は緩やかに結びついて、詩情をかき立てます。（大佳）

出口失せ雪雪の切通し　　秋川　泉

この切通しの光景を電話口で聞いた。しっかりとこころに留め、よく咀嚼し俳句に表現できたと喜んでゐる。体験された者でしか伝へられぬものなので、「雪の舞ふ闇より深き切通し」とともにその時の光景がうかがふことができた。特異な体験は容易く詠めるものではない。何かのきっかけでまた詠みなおす機会があるやもしれぬ。

あをキーワード俳句辞典（よそ―らい）

和

秋霖や和室の敷居キシミおり　黒澤　佳子
和服著てゆくところなし亀鳴けり　竹内　弘子
初参り和服の若きカップルら　田中　藤穂

我家

大夕焼我家を四片囲ひける　赤座　典子
夾竹桃道の途中にある我家　佐藤　喜孝
名を付けむ我家の一員蟇　赤座　典子
約束の様に我家の彼岸花　須賀　敏子

分かれ

分かれ道鼓動を聴ける冬の蛇　森　理和
枝分れして一族のかすみけり　田中　藤穂
踏青や分れし道のまた出会ふ　東　亜未
枝分れ枝分れして糸櫻　東　亜未
天と地と分れがたきに亀鳴けり　佐藤　喜孝
夏野原ここに分れて徑と路　佐藤　喜孝
三色に海原分れ秋日和　森　理和
追はれたり二手に分かれ嫁が君　篠田　純子

別れ

葉牡丹を鬼門に置きし別れかな　堀内　一郎
夏大根辛きを噛んで別れとす　後藤　志づ
銀木犀別れはさりげなくが良し　後藤　志づ
花束に小手毬ゆれし別れかな　森　理和
風の別れ熨斗目とんぼを空に撒き　堀内　一郎
旅は別れか別れは旅か葡萄摘む　堀内　一郎
後手に閉めて別れて黴臭し　篠田　純子
憧れの出会ひも別れも金魚すくひ　篠田　大佳
冬ぬくし上野の駅で別れけり　堀内　一郎
暮の春星の紛れにふと別れ　佐藤　恭子
悔い残す別ればつかり蛍草　篠田　純子
また別れ目のまはりから紅葉して　堀内　一郎
会ひ別れこころたひらに秋の声　鎌倉喜久恵
別れぎは夕三日月を指させり　田中　藤穂
終の別れ身ほとりに石蕗の花　芝　尚子
高原の小春日終の別れかな　東　亜未
春の宵メトロの駅で別れしまま　森山のりこ
春の宵こゑかけ合うて別れけり　佐藤　恭子
冬の虫別れはうしろ振り向かず　鈴木多枝子
すがれ萩別れの辞尼に残す　渡邉　友七
冬草に力をもらふ別れきて　田中　藤穂
歳末の渋谷の駅で別れたり　須賀　敏子
冬菊の白さ目に沁む別れかな　芝宮須磨子
今も別れはくれんの開くとき　堀内　一郎
舞ひ舞ひてすと別れ行く夏の蝶　芝宮須磨子
又会へぬ別れもありし春の雪　遠藤　実
様々な出会と別れ桜冷え　森山のりこ

素気なき別れもありて萩日和　鎌倉喜久恵
秋燕土手の工事場別れ告ぐ　早崎　泰江
冬の別れさいごにそつと胡蝶蘭　堀内　一郎
白梅の足元に散る別れかな　早崎　泰江
蛍くさいてのひら嗅いで別れけり　竹内　弘子
はらからの土に還りし春の別れ　早崎　泰江
日短くなりましたねと別れけり　田中　藤穂
別れ路や中天に月あればいい　森　理和
涙して別れて献花かすみ草　早崎　泰江
花粉飛ぶを言ひ駅頭に別れけり　田中　藤穂
名も告げず問はずに別れ一輪草　森　理和
別れしな母曼鑠と夏帽子　斉藤　裕子
後から冬日の温き別れかな　田中　藤穂
けふもまた別れて出會ふ梅雨の妻　佐藤　喜孝
ちぎりてもまた別れあり夕月夜　秋川　泉
笛の音の別れ醸すや神楽舞　黒澤　佳子
平成尽友も旅立つ別れ霜　七郎衛門吉保
神無月別れまっすぐやって来る　秋川　泉
桜の芽ほのと別れの時迫る　田中　藤穂

惑星

水色のこの惑星に春の雪　須賀　敏子
生れしは水の惑星この地球　大日向幸江

分け目

暖冬やお下げの分け目ｚｉｇｚａｇに　森　直子

若人

若人が年金語る彼岸寒　斉藤　裕子
若人に手を添へられて花の山　芝宮須磨子
若人の皓歯そろひぬ芸術祭　田中　藤穂
若人と共に一服初茶の湯　芝　尚子

輪ゴム

八月や輪ゴムで打ちしカレンダー　佐藤　恭子
手首の輪ゴムひとつもらって梅の花　佐藤　恭子

和三盆

佗助や舌にとろける和三盆　松本　米子
和三盆口にとろける梅雨湿り　早崎　泰江
和三盆篩にかけて雛の菓子　森山のりこ

技

氷上の技の間の技イナバウアー　木村茂登子
吸口は匠の技の雑煮椀　木村茂登子
伽羅路の合はせ技なりしゃきしゃきと　七郎衛門吉保
プロの技薄いトリュフも香のつよし　七郎衛門吉保
独楽回す技を忘れぬ昭和の子　七郎衛門吉保

鷲

不自由に慣るるも矜持檻の鷲　竹内　弘子
鷲一羽とび流氷はエメラルド　江倉　京子
口あきてかなしき貌す檻の鷲　渡邉　友七

モンゴルの野を馳ける鷲初相撲　竹内　弘子
溶岩を鷲づかみしてもみぢの根　吉成美代子
漂へる流氷の縁鷲止る　赤座　典子
鷲掴みに叩く鍵盤春よ来い　斉藤　裕子
みづすまし思ひつきり水鷲づかみ　佐藤　恭子

和紙

紙漉場絹めく和紙を積重ね　田中　藤穂
やはらかな和紙に指切る神無月　関口　ゆき
寒梅や和紙一片の昼の月　森　理和
和紙滲み南瓜のやうな柿一つ　東　亜　美
冬牡丹和紙で折りあぐ鏡獅子　芝宮須磨子

和室

和室に足まげて木の実をこぼしける　竹内　弘子
秋霖や和室の敷居キシミおり　黒澤　佳子

和食

秋の朝ロッジ和食派洋食派　吉成美代子
竹落葉和食三菜木の器　長崎　桂子

忘る

木枯の窓辺仙人掌置き忘れ　芝　尚子
泊夫藍の咲くや会はねば忘れゆく　竹内　弘子
木の裡に忘れられたる梅雨の蛇　佐藤　喜孝
秋思なほ憂さ忘れ得ぬ晝の酒　鎌倉喜久恵
忘れられし風鈴鳴りぬ時雨るるか　渡邉　友七
忘れられ木の実朽ちゆく日々の晴　渡邉　友七
夏の月騒音なき町にもの忘る　渡邉　友七
睡蓮のぽつと咲きたるもの忘れ　後藤　志づ
団栗の色を忘れて十六年　篠田　大佳
はばたくを忘れましたか凍てし鶴　芝宮須磨子
探すもの忘れて日のなか梅の中　佐藤　恭子
淋しさを忘れてしまふ山法師　森　理和
分け入りて我忘れさす蝉しぐれ　鈴木多枝子
夭折の兄の名忘る網鬼灯　田中　藤穂
梅雨冷の忘れられてるパスポート　鈴木多枝子
風鈴に音色あること忘れぬし　早崎　泰江
梅雨寒や何か忘れてをりし午後　鈴木多枝子
盆踊忘れちやいない炭坑節　森　理和
吾が影を置忘れたり芒原　渡邉　友七
十二月八日忘れてしまひけり　堀内　一郎
柿を食べなにか忘れてゐるやうな　田中　藤穂
忘れ得ぬ総身の恐怖山棟蛇　早崎　泰江

憎き人忘れきれない夜の秋　森　理和
物忘れせしこと忘れ夜の秋　篠田　純子
寄席噺に笑つて忘れ夜の秋　芝宮須磨子
忘れものしたやうに吹く秋の風　鎌倉喜久恵
稿依頼忘れ自稿と初時雨　佐藤　恭子
御降りや去年のことは忘れませう　木村茂登子
呆気なく戦は忘る手毬唄　佐藤　恭子
服薬を忘れる日々や二月尽　鎌倉喜久恵
犬ふぐり野焼のことは忘れをり　早崎　泰江
薫風やどこへ行つても忘れられ　堀内　一郎
春分や野球に涙時忘る　森山のりこ
桐の花忘れられたりわすれたり　堀内　一郎
度忘れの夫婦の会話黐の花　篠田　純子
蕗を煮る忘れてをりし家の味　芝　尚子
雨あがり時を忘れて草を取る　芝　尚子
忘れたきこと多き日々雲の峰　早崎　泰江
忘れられ秋の風鈴鳴り止まず　堀内　一郎
老人の忘れるちから秋の虹　芝　尚子
思い出しまた忘れゆく冬隣　堀内　一郎
忘れかけた風景に冬惜しみけり　東　亜　未
翌日は晴木枯を忘れ去る　堀内　一郎
私を忘れし人や残る雪　東　亜　未
金雀枝や夢に起こされ夢忘る

田螺暗く忘るることの息遣ひ　森　理和
青嵐ささいな事の忘れられず　森山のりこ
青鬼灯歳を時々忘れてる　須賀　敏子
もの忘れわすれぬ唄に赤とんぼ　堀内　一郎
あぢさゐを忘れてからの針仕事　堀内　一郎
あぢさゐや傘も忘れず荷の内に　木村茂登子
見るものはほとんど忘れ白あぢさゐ　篠田　純子
思ひ出しまた忘れたる蓮は實に　芝　尚子
忘れかけて又思ひ出す原爆忌　森山のりこ
過ぎし日は忘れて居らずシクラメン　堀内　一郎
忘れたきことの多さよお茶の花　鈴木多枝子
鍵かけて何か忘れる春の昼　鈴木多枝子
薔薇の花匂へり嫌なこと忘る　吉成美代子
何やらむ忘るるばかり小猫抱く　芝　尚子
心太わらってゆるす物忘れ　田中　藤穂
近頃は忘れ癖つき春帽子　鈴木多枝子
不機嫌を忘れてしまひ梅雨晴間　斉藤　裕子
まどろみて見し夢忘れ藤の花　渡邉　友七
夕茅花砂のつまりし忘れ貝　佐藤　喜孝
思ひごと一時忘れ毛糸編む　須賀　敏子
コーヒーは忘れずに飲む春障子　堀内　一郎
初わらひ笑った譯を忘れけり　芝　尚子
落葉踏む忘れたきこと踏みしめる　早崎　泰江

人の名を忘れてばかり寒明ける　鈴木多枝子
夕牡丹しまひ忘れし雛人形　遠藤　実
蕎麦食べて忘れてきたる夏帽子　田中　藤穂
家中に忘れものあり冬至粥　佐藤　喜孝
造幣局の桜に我を忘れけり　赤座　典子
薔薇の園とげありしこと忘れをり　早崎　泰江
西瓜食む恍惚として忘れ顔　堀内　一郎
割算かけ算忘れぬやうに鉦叩き　堀内　一郎
百合白し葬のあとさき忘れたる　竹内　弘子
茗荷汁あれやこれやと忘れゆく　芝　尚子
内服薬忘るる日あり花茗荷　長崎　桂子
帰り花いろはにほへど名の忘れ　東　亜　未
吸ひ止しを置き忘れたか日向ぼこ　佐藤　恭子
地震の揺れ忘れられずに辛夷　須賀　敏子
逝きし人を忘れてしまふ寒紅梅　佐藤　恭子
大津波が忘るる六月の海青し　佐藤　恭子
茗荷のせいにしてゐる物忘れ　木村茂登子
忘れては思ひだす花雲の峰　堀内　一郎
黙祷すあの暑き日を忘れめや　木村茂登子
カナリアは歌を忘れて白いマスク　堀内　一郎
忘れ得ぬこと多かりし年の暮　早崎　泰江
飯桐の実の赤々と忘れられ　堀内　一郎
いまだまだ記念日忘れぬ雪割草　遠藤　実

雪斜め二・二六は忘れられ　堀内　一郎
梅の花記念日忘れぬ妻が居て　遠藤　実
姉妹の忘れた遊び蚊帳吊草　大日向幸江
消し忘れたるかにひとつ冬烏賊火　定梶じょう
憂きことをしばし忘るる紅葉かな　早崎　泰江
忘れぬやう小枝を折りし山眠る　大日向幸江
忘れしこと忘られぬこと冬の蜂　田中　藤穂
けやき黄葉空の青さを忘れぬし　大日向幸江
茗荷汁今さら何の物忘れ　木村茂登子
冬うらら朝の薬を飲み忘る　田中藤穂
折紙の折り方忘れ著莪の花　篠田　純子
歩くまでの努力忘るな鯉のぼり　木村茂登子
夕虹に常の用事を忘れたり　長崎　桂子
三夜寝れば憂きこと忘れ紫蘇の花　田中　藤穂
眼薬を忘れないでと秋の旅　須賀　敏子
戦争は忘れぬうちに駒廻し　佐藤　恭子
鬼の貌忘れてをりぬ春の旅　赤座　典子
木瓜まっ赤初心な忘るべからずと　定梶じょう
人の名をするする忘れ鳳仙花　田中　藤穂
物忘れ風邪のせいにし紅を引く　田中　藤穂
置き忘れ慌てて戻る福袋　斉藤　裕子
家移りや忘れられたる菫草　秋川　泉
帰ること忘れて見入る冬怒涛　秋川　泉

あとがき

別所沼吟行

十月十七日（火）詳細別途にて

狭庭 2

家の前の道は袋小路である。その道から自転車置場を抜けると狭庭がある。自転車置場の左には春先ににょきにょきと生えてあれよあれよといふ間に七月には二階のベランダまで達するほど。何と言う木かわからないものが生えてきた。ネット上では桐の木のようだ。あまりに葉が大きいので測ったら七〇センチ四方の大きさであった。クーラーの室外機の上に日除がはりに葉柄を折りかぶせている。いまいち利かなかったクーラーも何とか頑張ってゐる。伐るつもりだが健気に日陰をつくってくれるので秋まで待つつもり。右側にはコムラサキが花をつけた。品のよい花が出てきたものだ。これも楽しみ。これらの植物で自転車も見えにくひ風情のある入口になってゐる。越してきた年は虫の音を聞かなかった。雑草を一本も生やさぬ執念で土の上を鎌で撫でてゐる人を数回見かけた。管理会社に通知したらなぜか来なくなり、雑草が生えてきた。草がなければ虫もゐないはずだ。昨年はそこにいっぴきの蟋蟀が来て細々と泣いてくれた。スマホで録音して楽しんだ。精霊バッタが葉の上で休んでいるのも見た。今年はよく見ると、蟋蟀の幼虫らしきものが動いている。精霊バッタの子も見かけた。一匹の蟋蟀に期待してここを「一華堂庭」と仰々しく命名した。三文字にしたかったのだが……。

短文のお願ひ　題「朝」

朝は昧旦、あけぼの、あかつき、とはじまり鶏・鴉・雀が鳴き、牛乳瓶のこすれあふ音、新聞が投げ込まれる音、そして納豆売りの声が朝を告げ渡る。朝に暗い話は似合はない。

本当に短くて結構、皆様の「朝」をお書きください。鶴首してをります。（喜孝）

二〇二三年七月号
発行日　七月二一日
発行所　〒177-0042
東京都練馬区下石神井一丁目六の三
サンハイツ石神井2　一階
電　話　090　9828　4244
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番 018）4586402
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）